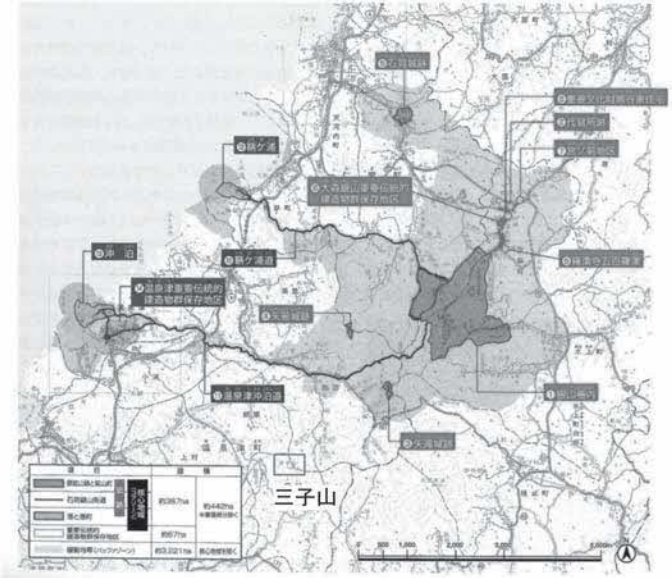
石見銀山講座

石見銀山と山城
―築城と合戦の実像―

平成27年8月30日
於読売文化センター
高屋茂男

1　出雲、石見の戦国時代
2　石見銀山と山城
3　石見銀山の城と合戦
4　石見の山城、島根の山城

石見銀山資料館『石見銀山学習資料』より転載

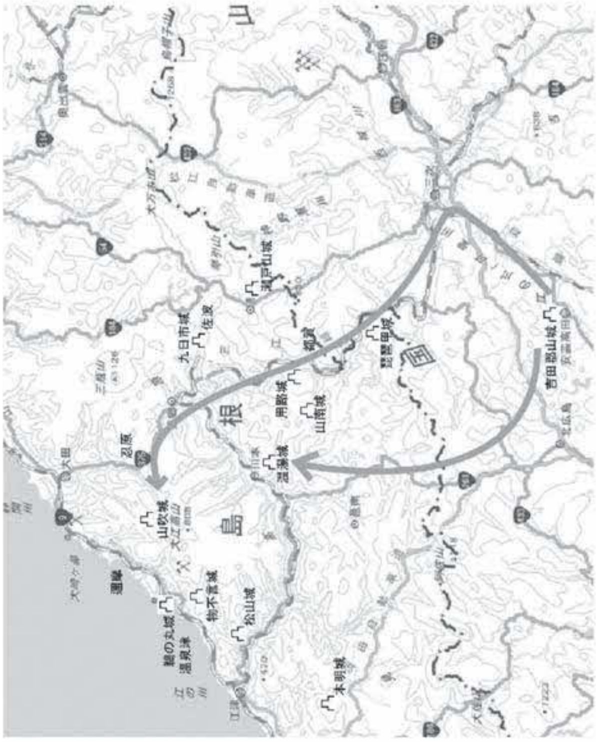


1

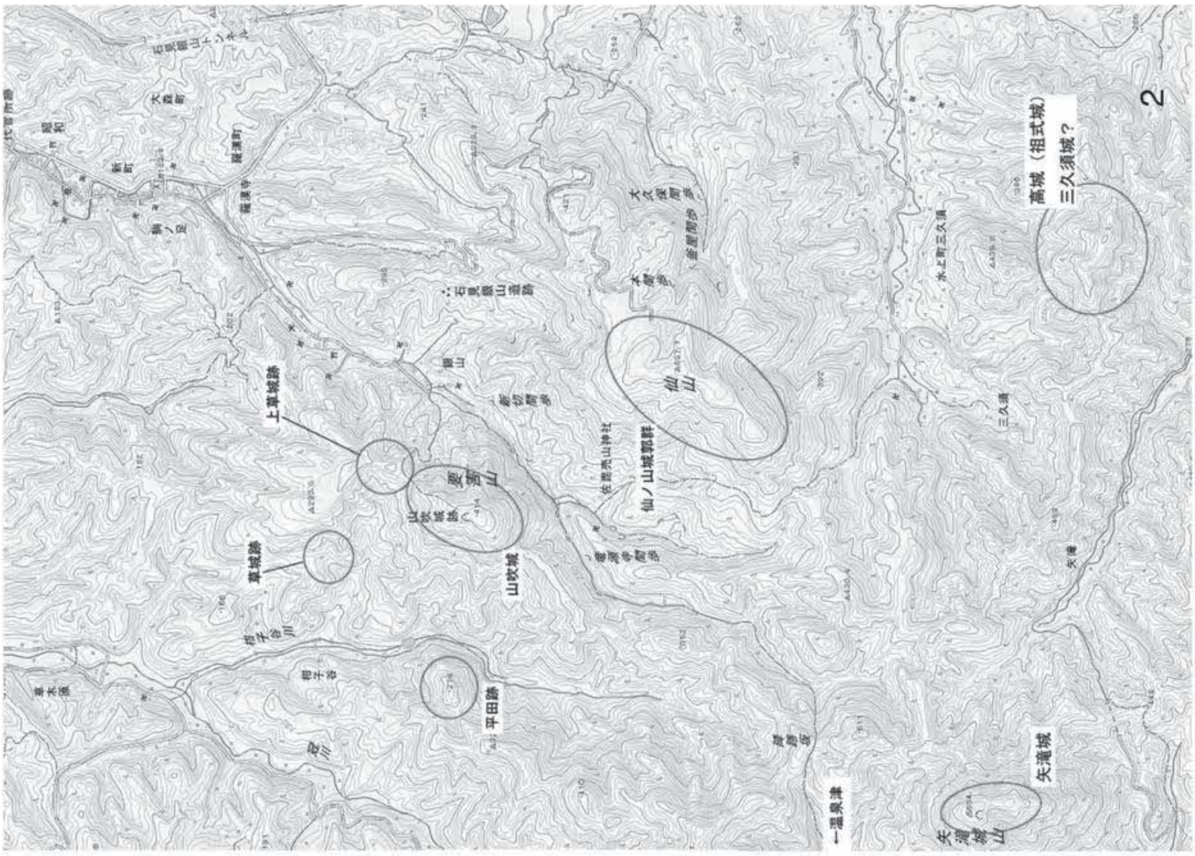
戦国時代の石見銀山―大内氏・尼子氏・毛利氏の戦い―

永正一四年（一五一七）　大内義興、石見一国の守護職に就任
大永　六年（一五二六）　神屋寿禎、銀山の開発を始める
享禄　元年（一五二八）　大内義興、矢滝城を築き銀山の砦とする
　　義興没、義隆が跡を継ぐ
天文　二年（一五三三）　寿禎、博多から宗丹・慶寿を招き、灰吹法を導入
　　この頃から銀の大増産が始まる
天文　六年（一五三七）　尼子晴久、銀山を攻略
天文　八年（一五三九）　大内義隆、銀山を奪回
　　毎年銀五〇〇枚を徴収する
天文　九年（一五四〇）　尼子詮久、銀山を攻略
天文一〇年（一五四一）　尼子経久没
天文一〇年（一五五一）　大内義隆、家臣・陶隆房（晴賢）の謀反のため自殺
天文二一年（一五五二）　尼子晴久、銀山を領有
天文二五年（一五五六）　毛利元就、安芸の厳島で陶晴賢を倒す
弘治　二年（一五五六）　吉川元春・石見に進攻
弘治　三年（一五五七）　毛利元就、周防・長門を平定
　　毛利軍が銀山を攻略
永禄　元年（一五五八）　尼子晴久、忍原（大田市川合町）で毛利軍を撃破
永禄　五年（一五六二）　毛利元就、石見国をほぼ平定、銀山を手中に収める
永禄　六年（一五六三）　毛利元就、銀山を朝廷と幕府に献上
永禄　七年（一五六四）　毛利氏、朝廷に金を五枚、銀を五〇枚献上（以後、度々朝廷に金銀を献上）
永禄　九年（一五六六）　尼子義久、毛利氏に降伏
元亀　元年（一五七〇）　毛利氏、温泉津に鵜丸城の築城を命ずる
元亀　二年（一五七一）　毛利元就没
天正　六年（一五七八）　毛利輝元、播磨上月城を陥し、尼子勝久を自殺させる
天正一〇年（一五八二）　織田信長、本能寺で自殺
　　毛利輝元と豊臣秀吉が和睦
天正一八年（一五九〇）　豊臣秀吉、全国を統一する
文禄　元年（一五九二）　豊臣秀吉が朝鮮出兵を命じ、毛利輝元も主力として参加
　　石州銀が軍事費用として使われる
慶長　五年（一六〇〇）　関ヶ原の戦いで徳川家康が勝利
　　徳川氏に対抗した毛利氏は山口へ移され、石見銀山は徳川家の直轄支配へ

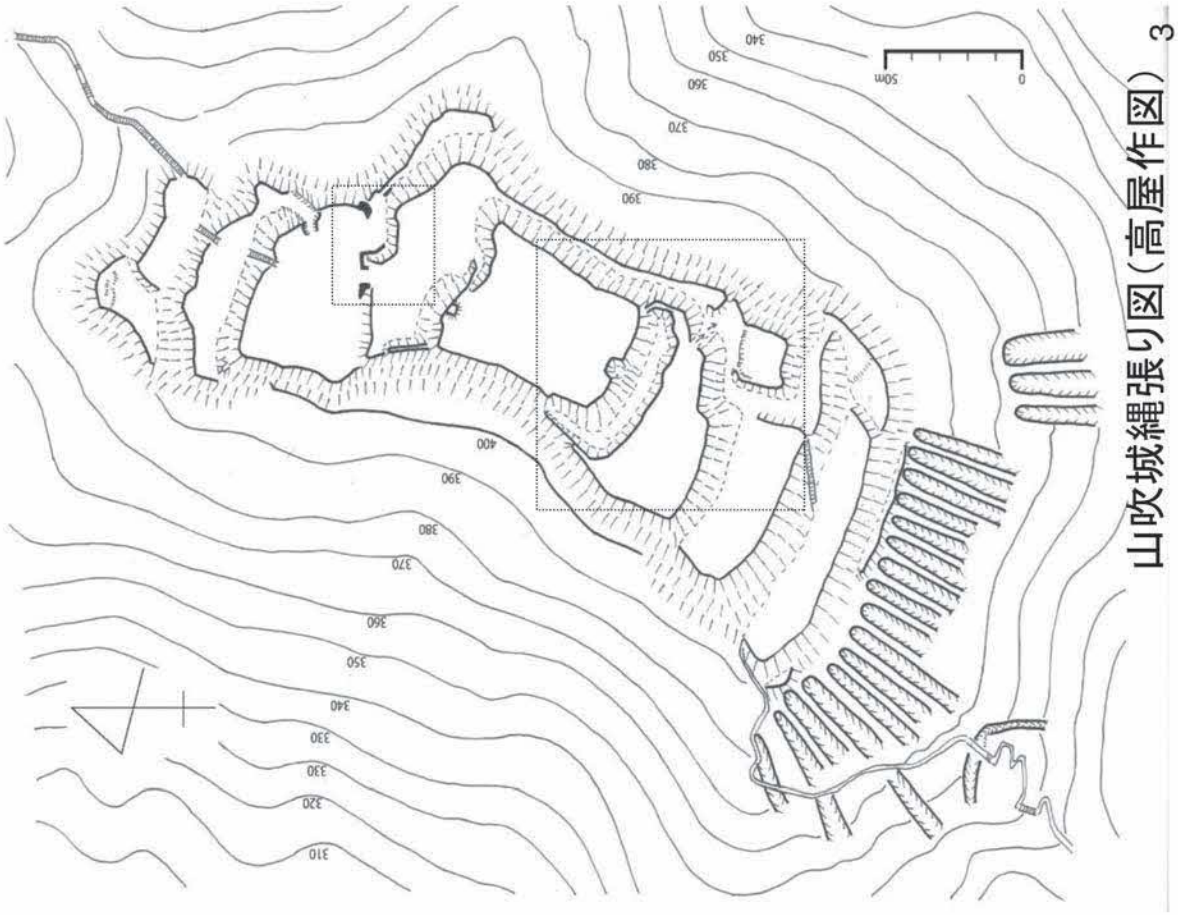
石見銀山資料館『資料で見る石見銀山の歴史』1999



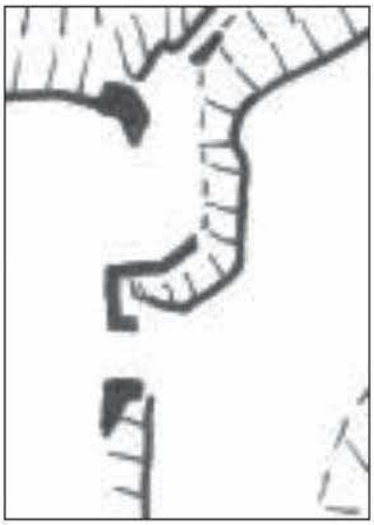
毛利氏の石見銀山攻略の進軍ルート

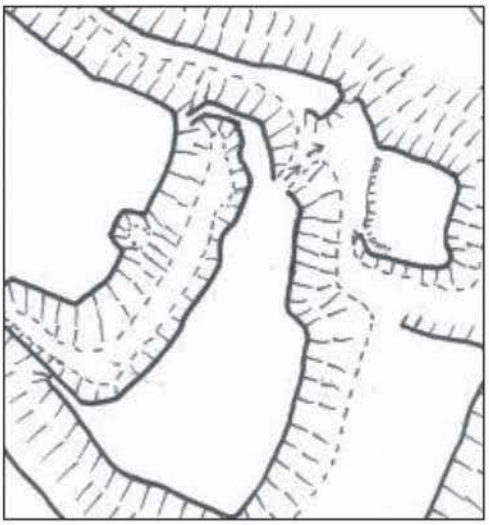


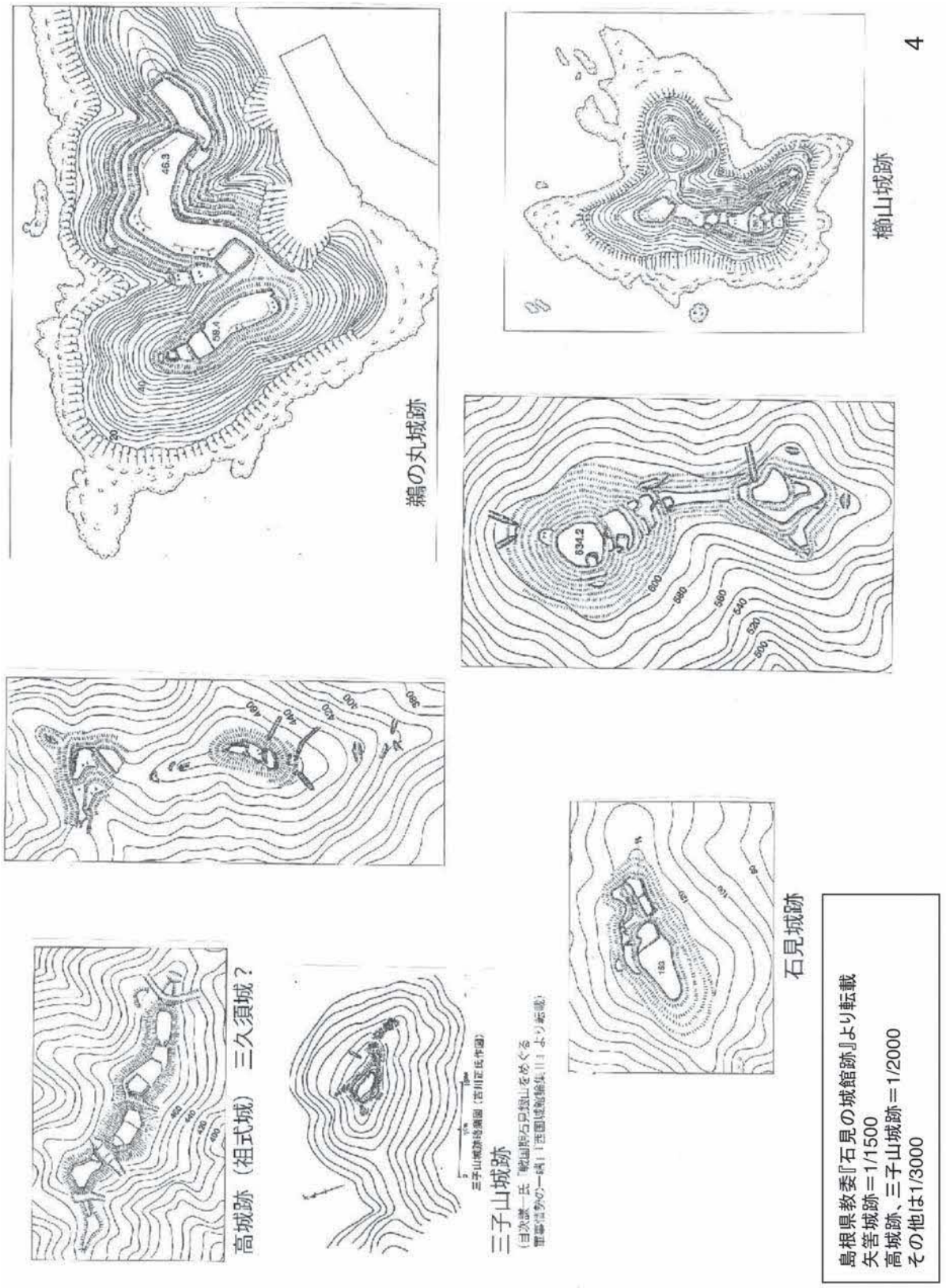
石見銀山周辺の山城位置図



山吹城縄張り図（高屋作図）3






鵜の丸城跡
櫛山城跡
4
高城跡（祖式城）　三久須城？
三子山城跡
石見城跡
島根県教委『石見の城館跡』より転載
矢筈城跡＝1/1500
高城跡、三子山城跡＝1/2000
その他は1/3000

『萩藩閥閲録』巻101 児玉34
毛利元就・輝元袖判同氏奉行人連署奉書

一井枚	温泉三方
一井二枚	大国三方
一四拾八枚	静間
一廿二枚	波積
一八枚	宅野
一四拾八枚	仁摩
一七枚	磯武・馬路・神護
一廿五枚	下都治・井田
一十一枚	福光
一八拾枚	大江
一六拾枚	河上り
一十五枚	西郷・雨河内
以上	

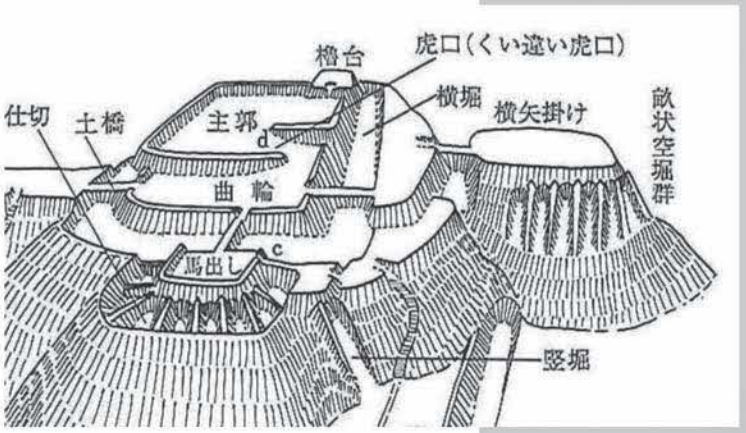
右城請之事、從三月十日内可被相調之由被迎出候、不可有油断之趣可申旨候也

二月十日

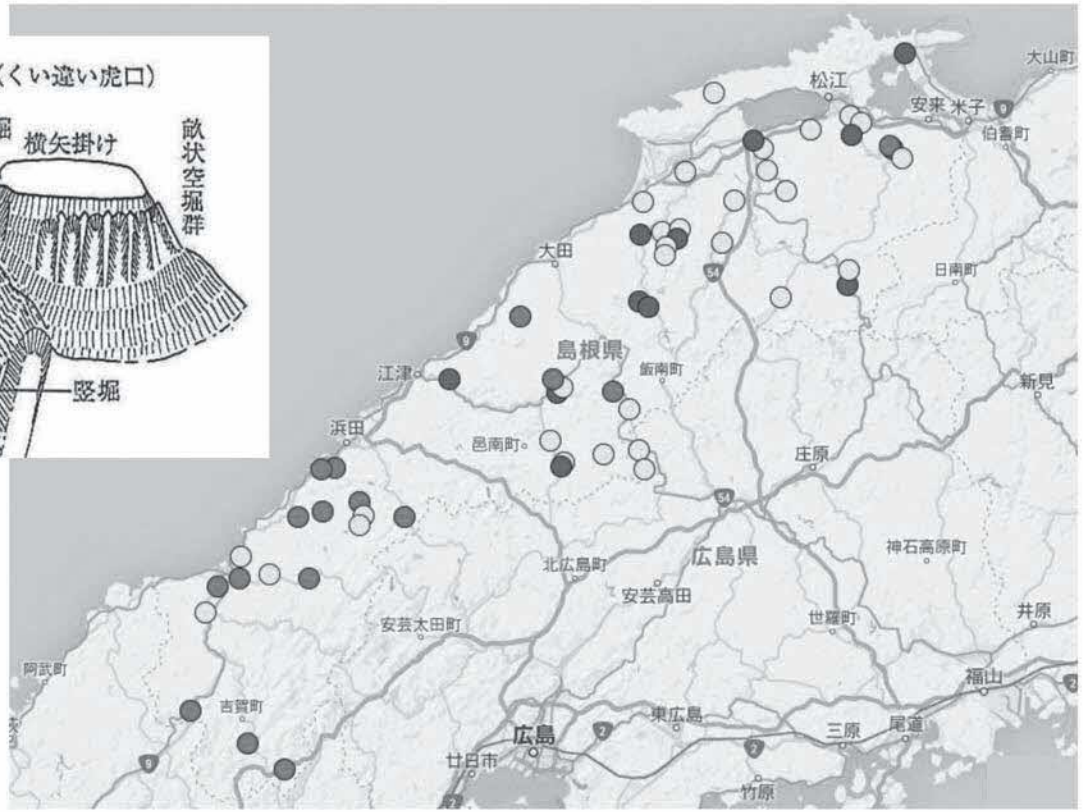
桂左衛門大夫判
見王左衛門尉判
井上三郎右衛門尉判
粟屋但馬守判
園司内蔵允判
飛騨守判

武安木工允殿
内藤内蔵丞殿
河内新左衛門尉殿
甲田三郎兵衛殿
見王美濃守殿

温泉津航空写真



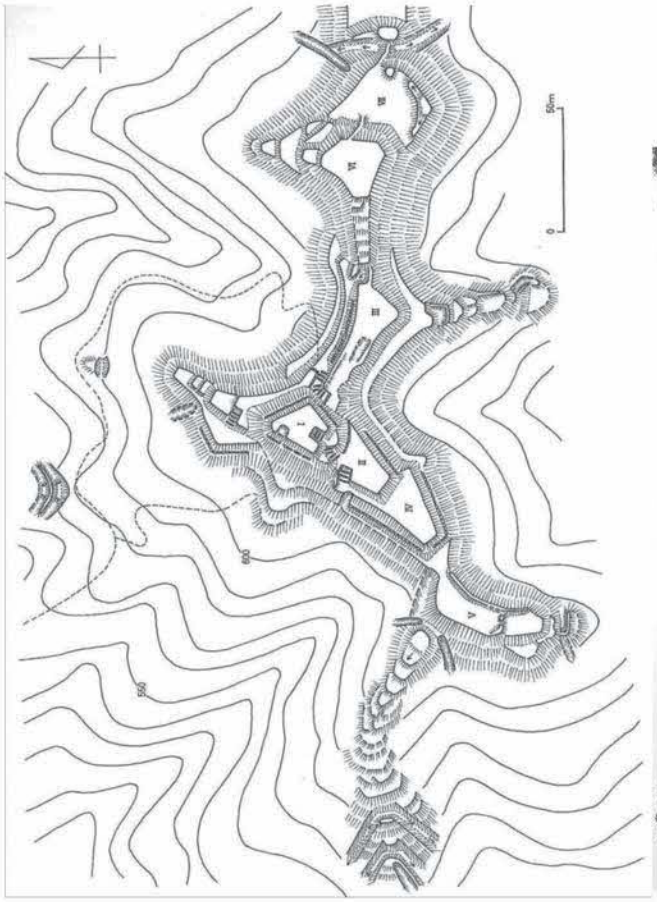
畝状空堀群のモデル
斜面部分に畑の畝のように
竪堀を連続して並べたもの。
曲輪との位置関係や上部に
横堀がつくものなど様々な
分類し案がある



島根県内の畝状空堀群
●ランクA　竪堀20本以上
●ランクB　竪堀10～19本
　ランクC　竪堀10本未満

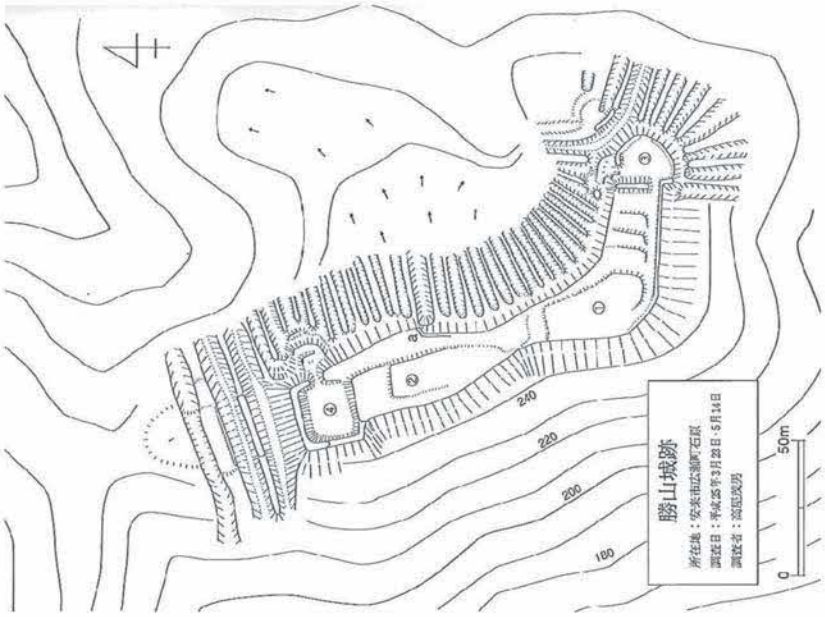
全国の畝状空堀群集中地域
※東日本はデータ収集が不十分

6



瀬戸山城（飯南町）（中井均氏作図）

平山城跡発掘状況（京都府綾部市）



勝山城跡（安来市広瀬町）

7

山吹城跡関係

【史料1】　大内義長判物

『萩藩閥閲録』巻66刑賀佐左衛門

（大内義長）

判

石見国同郡郡刑賀郡五百貫地、同国邇摩郡内重富村肆拾貫地等事、先段於山吹城令焼失云々者、任當知行之旨、刑賀治部少輔長信可領掌之状如件

天文廿貳年卯月五日

【史料2】　福光久兼契約状影写

『大日本古文書　家わけ9　吉川家文書』35

先年至山吹之城久兼居城之儀被　仰出候、其剋取分究不弁、既御公役難成候之處、過分之預御合力、千今御公役連疇仕候、併御芳恩之故候、為其御禮、於西郷之内殿村八百田　壱段限末代ゆつり遣置候、然者、今度長門五正分之御社役所懸候處、是又為御合力貳百足被懸御意候、御懸之儀過分之至候、弥右之地末代無相違可有御知行候、如此少事なからも申談候上者、於子々孫々茂無御等閑可申承候、恐々謹言、

天文廿二年　　福光長部定

九月十三日　　久兼

吉川左近将監殿

参　御宿所

【史料3】　『萩藩閥閲録』巻66刑賀佐左衛門

（前略）

尼子家と元就公被及御鉾楯、尼子石州江発向之時、かうの城遊候時、御心遣之儀候間、刑賀之城を引銀山之内山吹之城江移候様にと御意ニ付、山吹江引移候處ニ、又尼子家被取懸候、此時藝州吉田より兵粮被籠候儀遅引ニ付、語卒及乱候故、尼子家江申入、検使　湯信濃守を引請被切腹、城兵吉田江引取申候、元就公江如御約束城を守、奉對御當家致切腹御奉公仕候

（中略）

一大内家より打渡證文等之儀、石州山吹城詰居候時焼失仕候　証文焼失之儀ニ付大内義長　鳴判物

（後略）

【史料4】　尼子晴久書状

『萩藩閥閲録』168巻　益田五郎兵衛

對南三人示給之得其意候、此表之事山吹已下之敵城悉伐捕之、厳本意候、其表之儀無油断、方々可有計略事肝要候、尚各可申候、恐々謹言

九月三日　　晴久判

益田刑部少輔殿

益田伊豆守殿

【史料5】　『萩藩閥閲録』巻55祖式右衛門八

（前略）

一永禄貳年七月、本城越中守盾籠候石州山吹城之御城御攻させ被成候處、城持堪候故御巻解被成、御退陣之節祖式迄御打入被遣、反乗居城二五六日御逗留被遣候、其間無二之御馳走仕之由ニ付、被成御書たる由ニ御座候

【史料6】　鞍懸豊勝寄進状

日御崎文書『新修島根県史　史料編（古代・中世）』所収

（足子晴久）

（花押）

敬白

奉寄進於　日御崎御神前に御定番之事

今度為山吹之城御番にて罷出候、公私息麓無御座様仁与致立願候、被成其御心得、御折念願候、然者神門郡久留原村之内、所はけ之前式俵尻、并反銭弐拾疋之分被成御直納、右之分可被御調候、加様ニ申定候て自然依年仁下作人等難渋申事候者、此方江被仰聞、以其上ヲ則有体仁可申付候、仍為後日寄進状如件、

永禄参年　　鞍懸藤兵衛尉

六月中日　　豊勝(花押)

御宿殿

【史料7】　毛利元就・同隆元連署状写

（『新藩軍記』巻山臣本城家）

御状具拝見候、示給趣連承知候ハ、誠不思儀与申様にて候、

一本城所ハ状之事申候歟、努々被遣間敷候ハ

一口上ニても本城・此方申かハし候なとの事被仰聞間敷候ハ、雲州番衆与本城とハとりにハ、せめてハ本こそ此方ハ一味候ハとの事も、申よくも候すれにて候条、本城を雲之番衆にはたさせ候てハ、更無所詮候ハ、去年両本陳之刻も、法泉寺より被申遣候、一円大社にハ取相候ハねとも、さすか法泉寺にハしたしきやうに候つる、

一松かハと成らんにハ、其方物かたりの分ハ、雲州番衆ハ引分候事もあるくハ候、其時者いつれ成共、此方ハひけ候ハんかたを、町人等相種候て、馳走候ハと可被仰候ハ、さ候者可為忠節由可被仰聞候、さ候而可有御返候ハ、

一彼松かわニハ、雲之番衆・本衆間わるき由、其方申候ハ共、更誠しからす候、さ様之事ハあるましきよし、此御あいは可然候ハ、

一此次をもつて、雲之番衆之内、古志を初として、五人之内、此方ハらともぬき口にも候する衆を、引候て見候而ハれ候ハかしと可被仰候ハ、彼松かわを使にして、御ひき候て御らんあるくしとハ、さいなき事、又彼衆之内にも尼を恨候衆も候ハんやニ候ハ、暮々雲番衆・本事引分候様共ハ努々有間敷候ハくとハ、ちしハ物のふしきニて、さ様之事も候ハん時は、此方ハ成そうに候するかたを、町人をもよほし候て合力候ハん事可然之由、可被仰まてニて候、其分計ニて可有御返候ハ、恐々謹言、

（永禄三年カ）

七月廿二日　　隆元　判

元就

判

元春　まいる　御返報

「　　両人

元春　まいる　御返報　　隆元」

【史料8】　小笠原長雄感状

清水文書『新修島根県史　史料編（古代・中世）』所収

去月十二日銀山手利殿動之時、於山吹水手僕従九郎左衛門敵一人討取候、時分柄一入神妙候、彼者可加褒美之事肝心候、長朝忠儀候、弥忠節肝要候也、

永禄四年

五月中日　　長雄(花押)

大蔵丞殿

【史料9】　『萩藩閥閲録』巻65神村権

（前略）

吉原豊後守元殿　始藤左衛門　五郎兵衛

天文之比より元就公厳御様下、数度軍忠有之、隆泉公御備下成、永禄之比雲州尼子晴久御取話之時抽約束、其以後石州本庄生害被仰付、彼居城銀山之山吹一在番任候

天正十一年七月二日死

（後略）

矢滝城跡関係

【史料10】　毛利元就書状

『萩藩閥閲録』巻11浦文書

御状到来拝見候、来鳴江有御出、上国境衆以下被仰調之由候、誠肝要候、御辛労更以無申計候、仍此条態可申候歟、御飛脚到来所希候、銀山尼子陣之事、此方為後巻罷出候事、其間候而浮立候、然彼生捕二匿候此方人数、佐波衆申談中湊之山江打上成行候歟、則時退散候、山吹衆敵数罷討捕由候、左候間三人衆矢滝三ツ子以下敵城悉退散之由候、昨日佐波衆此方之衆至泥田相動、則時切腹候、其儀大田江相動之由候、定而大田之事茂可事行候歟、比時雲州江仕懸候は、彼国面境は難可任存分候、防州くの儀可差急候条不及兎角候、小笠原之儀は急度可仕話趣候は仕語候て明隙可被下候、若又少茂可相支趣候は先差捨各防州江可被下候、尼子方被取出候而、存之外此口頓明隙候、御味方中厚連之至候、猶又自是可申候、教協謂言、

（弘治三年カ）

八月九日　　元就　御判

乃美兵部丞殿御返報

石見城跡関係

【史料11】　（温泉）信濃守英水寄進状

所収家文書　岸田裕之「大名領国下における武家相物親方岸内氏の性格と動向」『大社町史研究紀要』四所収

大社

　奉寄進

　常燈

右意趣者、島災是命武運長久、別者至石州諸国、温泉津串山井銀山浜冬山、任其外近隣郡石見悉存分、所々令知行成就、如

　永禄八年五月中八日　　信濃守英永　（花押）

【史料12】　『九州道の記』

　天正十五年（一五八七）四月中九日条（部分）

　『群書類従』紀行部巻18所収

廿九日、石見の大うらと云所にとまりて、明るあした、仁間といふ津まで行に、石見のうみあらきといふ古事にもたがはず、白波かゝる磯山のいはほそばたちたるあたりをこぎ行くとて、

これやこのうき世をめぐる舟の道石見の海のあらき波風

それよりやがて銀山くゝえてみるに、やまぶきと云城在所の上に有をみて、城のもゝとはりなれやまぶきよりもほる白銀を山吹にして

（以下略）

櫛山城跡関係

【史料13】　公修外五名連書状

多田家文書　『新修島根県史史料編（古代・中世）』所収

参段、内志段別

五百文前也、

今度櫛山御城敵取詰候、餘手辛勞無比類候、庶領殿御在山口之事候間、各分別口口、右肝付者於在所致被沙汰候、人數跡以可申候、加判如此候、弥向後可有忠節候之狀如件、

　天文九年

　　十一月十一日　　公修　（花押）

　　公堅　（花押）

　　公秀　（花押）

　　公忠　（花押）

　　公国　（花押）

　　公守　（花押）

　　出原次郎四郎殿

【史料11】を参照

鵜式城跡関係

【史料14】　毛利輝元書状

久利文書『石見久利文書の研究』所収

温泉津鵜丸城誘候、申付候候、御分領事、必早晩堅固可被申付事肝要候、為此申候、恐々謹言

　九月廿七日　　輝元　（花押）

　久利左馬助殿

【史料15】　毛利輝元書状

中島文書　『新修島根県史史料編（古代・中世）』所収

鵜丸普請多分相調候哉、尋可然候、就其申越之通承知候、委細従二太右所可申聞候、弥無緩可遂其節候、謹言

　三月十一日　　輝元　（花押）

　児玉左衛門尉殿

　内藤内蔵丞殿

　□□□左衛門尉殿

　□□□□□□殿

【史料16】　毛利輝元書状

『萩藩閥閲録』巻146佐々木某右衛門

鵜丸城誘之儀、其方兩人有馳走、可申付之事肝要候、委細従但馬守所可申聞候、謹言

　三月十四日　　輝元御判

「武安左兵衛尉殿

　神田三郎兵衛尉殿　　輝元」

【史料17】　毛利輝元書状

『岩国藩中諸家古文書纂』6巻58番

温泉津鵜丸城誘【　】普請之儀、馳走可為祝著候、猶武安左兵衛尉可申候、恐々謹言

　四月三日　　輝元　御判

　　祖式能千代殿

　　御返報

矢滝城跡関係

【史料18】　『銀山山記』（部分）

『新修島根県史史料編（近世下）』所収

（前略）

享禄元年大内義興矢滝の城主を以銀山の押とす、矢滝の城銀山より一里計り南也此時小笠原長隆、志谷修理太夫、平田加賀守を以矢滝の城を攻落す、頃ハ享禄四年卯二月下旬なり、

（後略）

【史料19】　『中書家久公御上京日記』

　天正三年（一五七五）六月二五日条

『神道体系』文学編所収

一　廿五日、打立行に、肝付新介二行合候、加治木衆三十人ほと同行、さて西田の町を打過、温泉津に着

（後略）

山城と街道

【史料20】　毛利元就書状案

（熊谷家文書　131）

（前略）

二石州表之事、乱にて、何とも矣上千万候、如仰元春、隆家、一昨日被出候、都賀、用路計二ては、佐波へ伝聞成候条、山南一城取付、佐波へ伝二仕度由候、此段者、於岡須那、此方勢たけをも見合、敵方之趣、元春、隆家、刑部太輔以下申事候、

（後略）

（弘治二年）　　右馬頭

　三月廿日　　元就

　（熊谷信直）

　兵庫頭殿　御返報

【史料21】　毛利隆元書状

（『萩藩閥閲録』巻50飯田与一左衛門）

其方事各令同道、至佐波泉山忠々可参城、興連江此書状、其方随身候而可申渡候、我々事急度爰許打立迄候、此辻能々可申渡候、猶此者可申候、謹言

　（弘治二年）

　卯月一日　　隆元　御判

「飯田與一左衛門殿　　隆元」

【史料22】　毛利元就書状写

（譜代・刑賀治部左衛門信泥）

『萩藩閥閲録十二』

就彼一行之儀方々給候、令承知候、委細又御返事申候、勢衆催候而、敵方へ其聞共ある〻き事も不可然候、又雲州衆・河本衆手当候へて不可然候へん儀をも下存候、兎二角任越（佐波興連）・刑賀（長信）と能々御談肝要候、彼両人依存分可被相定候ゝ、猶各へ申候間不能二二候、恐々謹言

　（弘治二年）

　五月二日　　元就　御判

　（宍戸）隆家

　（吉川）元春　御返報

【史料23】　毛利元就自筆書状（毛利家文書）

『大日本古文書』636

忍原之事、落去之由、夜中申越候、不及是非候、然間、左波之事可有如何候や、不及推量候、とにかく二都賀之心遣たるゝく候、さ候間、我等事今日北安芸迄も罷出、聞合、可副力候、就其談合申度候へ共、御しつらひのよし候之間、不及申候、何も追々可申候、恐々謹言

　（弘治二年）

　七月晦日　　元就（花押）」

【史料24】　毛利元就書状写

（『萩藩閥閲録』71佐波庄三郎）

都賀半分之事、弓箭中之儀連之置候、被御知行、用路御任城肝要候、猶両人可申候、恐々謹言

　弘治弐

　八月廿六　　元就　御判

　佐波興連

佐波隆秀　御宿所

【史料25】　毛利元就書状写

『萩藩閥閲録』84　児玉弥七郎

（前略）

一井原へ相城可被申付由候、是は被急候事さらあるへく候へ共、此条も我等心中には、近比いそかれす共と存候、去々年佐波の現形を、元就・隆元際明候て打帰候するまて被相待候へと、いかほとゝ刑部大輔（口羽通良）所へ申候処、佐波方茂刑太もいそき候て、岩国に敵人候最中に現形させ候て、当座に珍しき事なきに付、可本もゆりすへ候つる、此度井原之相城之事へ、それにはにさる事ニて候へ共、雲州にも世上の色を見候とまても、河本及心遣候へゝ何方迄も可罷出候、雲衆方迄も罷出候へ者、はや石州口も御とり相之儀までにて候、雲衆を引出され候事ニてもあるへく候と存計候、

（後略）

（弘治3年）

三月廿三日　　もと就　御判

児　若（児玉就秋）

【史料26】　毛利隆元書状

『萩藩閥閲録』巻169　糸賀助左衛門4

此注文前盛調候て可帰候、又佐波張山へも乍辛労可遣候間、可能越肝要候、旨儀へ利賀・静間大工ニハ能々懇ニ可申聞事肝要候

石州之国ニ在陳候衆へ為使可遣候間、早々可罷上候、旨儀者尼子退散之儀又ハ辛労之通申遣候、相心得可申候、謂言

八月十二日　　隆元　御判

「糸賀平左衛門尉殿　　隆元」

【史料27】　「老翁物語」

『毛利史料集』（第二期戦国史料叢書9）

（前略）

一、本庄越中守、須佐おの高矢倉居城也。石見張山やまふさの城へ、芸州より利賀山城守、高倉源四郎両人を城番に置かせられ候、本庄程近く候て、方角罷り出通路を差留め候。元就公池田に御陣候。元春公は津賀、ようろう迄先手に御打出て候て、佐波常陸其外方角衆相催され、山吹へ兵糧御入れ候。通路の儀番替りに仰せ付けられ、吉川番衆番手の時、人数十八人相すへり先手に遣はされ候。二宮主助頭に参り候。山縣四郎右衛門、井上又左衛門、二宮七郎兵衛、山縣源右衛門尉、田中新兵衛、佐伯源左衛門、井上四郎右衛門、其外以上十八人、弓六張・鑓二本これ有り。

（中略）

尼子晴久石見大田迄罷り出でられ候。先勢河井道源罷り出で、銀山への通路差留め候。御当方より も、宍戸刑部、働きに打出され、佐波伝より兵糧入れさせられ候。先手の者し ん原へ出あい合戦仕り、互に懸引き候の時、此方中陣より何と見られ候や、引返し敗軍候。先手に相働き候者も是を見引返し候。敵（ママ）にのり退懸けゝ討取り申し候。此方衆隆家内同名大蔵、山内家中に深津、吉川衆岡崎七郎次郎越度候。下々数百人手負死人これ有り。是を新はらくつれと申し候。

【史料28】　毛利元就・隆元連署書状

「林愛吉所蔵文書」島根県立図書館所蔵影写本

今度三久須表之儀、敵仕退候、先以可然候、横道殿御覚悟御勤無比類候、能々可申入之通、従祖式両人所申越候、可被加御褒美事肝要候、左候間、口口候者、其覚不可有正体候条、我等至途中罷出、雖可聞合候、先吉川其外国々者共、至河本差出、貴所申談、可成其行候、以其上我等事不可有油断候、猶児玉若狭守可申入候、恐々謹言

（永禄三年カ）

二月十三日　　隆元（花押）

元就（花押）

小笠原弾正少弼殿

御宿所

【史料29】　毛利元就・隆元連署書状

『萩藩閥閲録』遺漏巻5　山本清左衛門8

態令申候、此間三久須在番候而普請等頂御馳走之由候、被入御心之段感悦者候、御入魂之至候、猶此者可申候、恐々謹言

三月廿六日　　隆元（花押）

元就（花押）

山本三郎左衛門殿　　進上

【史料30】　尼子晴久自筆書状

「中川四郎氏所蔵文書」『尼子史料集』七二一

此書状御らんしわけかたく候へ共、自筆にて申候、御披見候へゝ火中あるへく候

（中略）

一下佐波表二城之事、ことゝわす申付候てもしまり候へね者曲候条、委細口状以申候、御分別候てきと被仰越候者弥可成其心得候、せとの城干用候、よくゝゝ御分別候て可被仰越候、出張（ママ）の事ハ何時ともやすく候、さりなから取出候てもなに何を可申付と、大かたこゝもとにてさため候て罷出、其上にて見かけしたひ可申付候、はんたのかいなと、しかと可付ニ、さため候へくハ可然候、（後略）

【史料31】　毛利元就書状

『尼子史料集』九〇四

御状拝見候、於銀山通路、雲州衆被及合戦、被追崩、剰敵被討取頸持せ給候、誠大慶此事候ハゝ、手初之儀肝心候、喜悦此事候、更不及言語候、御内衆御動無比類事候、其故如此大利ニ成行事候、不及申候、唯今従是も以使者申候間、不能ニ二候、恐々謹言

（弘治二年）

五月十一日　　元就（花押）

（穴戸）隆家

（口羽通良）刑太

（吉川）元春　御返報

【史料32】　桂元忠・児玉就方連署書状

「益田家文書」『大日本古文書』

就御陣兵糧運送之儀、以御方被仰聞趣令被露候、然者一ヶ月中弐百石船弐艘可令勘過通、対温泉津奉行人申渡候、可被成其御心得事肝要候、恐々謹言

永禄八

三月十二日　　桂左衛門大夫

元忠（花押）

児玉内蔵丞

就方（花押）

大谷織部丞殿

御陣所

【史料33】　毛利輝元書状

『萩藩閥閲録』巻101　児玉左衛門8

従安木至温泉兵糧可差廻候、然間積舟之儀、自温泉可申付候、此間上表江之警固曜申付候、此度之儀は老中可為馳走之通、能々可申聞之候、謂言

（元亀元）

卯月九日　　輝元　御判

「井上但馬守殿（就重）

児玉美濃守殿（就久）

武安木工殿（就安）　　輝元

林土佐守殿（就長）　　」